

語りから見る原風景（2）：韓国濟州島の空間的特性を中心に

呉, 宣児
九州大学大学院人間環境学研究所（博士課程）

南, 博文
九州大学大学院人間環境学研究所教授

<https://doi.org/10.15017/835>

出版情報：九州大学心理学研究. 1, pp.123-137, 2000-03-10. 九州大学大学院人間環境学研究所
バージョン：
権利関係：

語りから見る原風景 (2)

— 韓国濟州島の空間的特性を中心に —

呉 宣兪・南 博文

A STUDY OF “GENFUKEI (ORIGINAL-SCAPE)” AS NARRATIVES

— Focus on the spatial attributes of Chejudo, Korea —

OH SEON-AH and MINAMI HIROFUMI

The current research is an attempt at presenting regional and cultural characteristics of GENFUKEI (Original-Scape) by looking at Chejudo as one of the many GENFUKEI of Asia. The purpose of this study was to focus on the spatial attributes of GENFUKEI. The method used was individual non-structured interviews. The participants were 10 adults living in Chejudo, South Korea. The participants were acquaintances of the experimenter and had developed a relationship such that relaxed interaction with the experimenter was possible. Results of conversations held with the participants revealed two axes of space-work and play-on the formation of GENFUKEI. In addition, spatial scope was classified into four categories: 1) within-home premises (ma-dang, ol-lae, nul, etc.), 2) dong-ne(gol-mog, pong-nang-a-re,etc), 3) Around dong-ne(deul-pan, nae-chang,etc), 4) dong-nae-bag(o-reum, duel-pan,etc.). For each of the four categories of spatial scope, representative images were taken from a picture book of Cheju Island.

key words : GENFUKEI (Original-Scape), spatial attributes, deul-pan, chejudo

本研究ではアジア原風景の一つとして韓国濟州島の原風景を取り上げた。原風景から見られる空間的特性を抽出し構造化するとともに、具体的空間を映像化して提示することを目的とした。それによって原風景の地域性・文化性が浮き彫りにされると考えられる。調査対象者は濟州島で生まれ育った知りあい10名である。調査には子ども時代の懐かしい風景や遊びについて筆者と語りあう方法(自然場面に近い非構造化面接)が使われた。面接の逐語録の分析の結果、空間・風景概念は出来事的、風景的、評価的な側面で言及されていること、仕事と遊びという2軸の活動の空間が原風景形成の空間として言及されていることが、示された。また仕事や遊び活動における原風景空間は次の4つの範囲に分類された。1)家の敷地内:マダン(庭), オルレ(家の進入路), ウヨンパツ(敷地内の畑)など, 2)ドンネ(住宅が集まっている主な生活空間):ゴルモク(裏道, 細道), 大きい木下など, 3)ドンネ周辺(町の周辺の自然的空間):ドルパン(野原), ネチャン(小川)など, 4)ドンネバック:町の住宅地とかなり離れた遠い所の自然的空間:ドルパン(野原)・オルム(小山, 丘)など。これら4つの範囲の活動の空間に対する具体的イメージは、濟州島を扱った写真集から逐語録で見られた空間に近い映像を抽出し、視覚的に提示した。

キーワード: 原風景, 空間的特性, ドルパン, 濟州島

I. 目的

「幼い頃はオルレ[ol-le]やゴルモク[gol-mog]でよく遊んだの」。この話は筆者が調査中によく聞いた話の一つである。「オルレ」は済州島特有の空間概念であり、「ゴルモク」は韓国一般の空間概念である。意味は「幼い頃は家の入り口から庭までの間にある小道や近所の小道で遊んだの」になる。しかしこの説明では十分ニュアンスが伝えられない。いや、むしろ違うニュアンスになってしまったような気がする。「オルレ」は済州島の人なら聞いてすぐイメージできるだけではなく、多様な思い出やオルレという空間・風景が持つ情緒的雰囲気が湧いてくるが、他の地域の人に理解させるためには数十個の単語を用いて説明しなければならない。一方「ゴルモク」は韓国人なら誰でもそれなりの空間・風景イメージができるが、ソウルのゴルモクと済州島のゴルモクのイメージが同じであるとは言い難い。本研究では、文化の特性・アイデンティティを理解する一つの手がかりとして「原風景」を取り上げ、原風景と関連する地域の空間特性を探索する。

原風景とは個人の美意識や価値観などに大きな影響を与える深層意識を形成する幼少期ならびに思春期の生活環境の風景や体験の全体像であり(進士, 1985), 例えば作家達の造形力の源泉として原風景が存在する(奥野, 1972)。このような原風景は、幼少期の体験に基づく個人表象の次元としても考えられ(高橋, 1978), 一定の風土を有する集団表象の次元としても考えられる(勝原, 1979)。原風景としての子ども時代の遊び体験は、生涯のさまざまな局面で回想され、回帰される「こころの故郷, あるいは根拠地」として大切な意味をもつ(南, 1995)。

80年代以後、原風景に関する実証研究は、心理的側面中心の分析(星野他, 1985;井上, 1995)と空間機能中心の分析(南他1995)の流れがある。星野他(1985)は、原風景を想起する時の感情に関する因子分析の結果、明朗爽快感、力動感、安静感をあげており、井上(1995)はネガティブ感、うっとり感、くつろぎ感、軽快感

など12の因子を示している。その際、原風景にあらわれる景観として山や谷間(25%)よりは平地が多く(62%), 川や海がある(42%)よりはない方が多い(46%)と示し、もっともよく見られる景観として田舎や郊外の平地をあげている(星野, 1985)。詳細な背景としては自宅の付近(39%), 田や畑(15%), 校庭や園庭(12%), 通学・通園路(12%)が多いことが示された。これらの結果は全体的傾向が分かる貴重な資料ではあるが、全国調査で平均的に示しているので、実際に人々が生まれ育った地元の景観や地形に関連しながら、原風景が形成されるつながりは見えない。また、方向性が異なる南ら(1995)の研究では、感情価を持つ空間機能を中心に分析して、原風景を7つの空間—恐怖空間, 秘密空間, 危険空間, 禁止空間, 安心空間, 交流空間, 探検空間—に示している。これらは、空間づくりなどを考えていく上で、有効な概念であるが、それぞれの地域の地形に基づいた空間特性に関する説明ではない。

呉・南(1998)は、原風景を多様な地域の人々全体の傾向や平均的なものとしてではなく、想起する主体者の意味づけに重点をおく語りを中心に分析している。その結果、原風景を語るという行為には常に想起し語る主体者の何らかの意味づけがあること、その意味づけは語り手が過ごした地域環境とそこでの多様な活動や体験に基づいていることが示された。具体的には、子ども時代を過ごした所の物理的・地理的特徴を描写するとき(風景としての語り)、その地域の多様な空間での多様な体験や活動を今現在またしているように描写しているとき(出来事としての語り)、また、自分が過ごした地域や経験した活動について何らかの評価や意味づけをするとき(評価としての語り)の3つの種類の語りがあることを明らかにした。

本研究は、主体者の語りを中心に分析する呉・南(1998)の研究の続きであり、特に空間性に焦点を当てる。原風景を語る人々の過ごした地域の空間的特性を主体者によって語られた言葉から抽出し、その空間性のポキャブラリーのカテゴリー化を試みる。本研究では、アジア

原風景の一つとして韓国済州島の原風景をとりあげる。その際、人間環境系の一つの単位として済州島を取り上げる。済州島の地理的・物理的条件とそこで過ごした人々が抱く原風景から、済州島の空間的特性を抽出する。空間特性を抽出・構造化しながら、具体的空間を視覚化し提示することによって原風景の地域性・文化性を浮き彫りにしていくことを試みる。

調査方法として、済州島で生まれ育った人を対象に子ども時代の懐かしい風景や遊びについて筆者と語り合う方法（自然場面に近い非構造化面接）を用いた。原風景を空間性から見ていくとき、済州島のどんな空間・場所が浮かび上がるのかを、まず語られた内容から抽出し、次に抽出された言葉が意味する空間特性を視覚的に具体化し、さらにその内容を吟味し詳細に記述した。これらの分析を通して、原風景をとらえるポキャプラリー（メタ的空間概念）を構成することが本研究の目的である。

II. 方法

1. 調査対象者及び調査方法

調査対象者は、韓国済州島で生まれ育った20代から60代までの知り合い10人である（表1参照）。筆者も済州島の生まれ育ちであり、済州島の言葉で自然場面に近い形態で語り合った。

表1 調査対象者のプロフィール

名前	性別	年齢	子ども時代の居住地域
① LYU	男性	41	済州市・北済州郡の涯月邑
② LYG	男性	40	済州市・北済州郡の涯月邑
③ KWH	男性	53	北済州郡の涯月邑
④ AYS	男性	28	南済州郡の表善面
⑤ HZS	男性	28	西帰浦市
⑥ HHW	女性	64	西帰浦市
⑦ OJS	女性	38	済州市・西帰浦市
⑧ KYR	女性	31	北済州郡の涯月邑
⑨ KOR	女性	30	南済州郡の南元邑
⑩ OJA	女性	24	西帰浦市

注) 市・郡、邑・面は行政区域の一つである。
地域に関しては、現在の地名を記した。

最初に「子どもの時のことでよく記憶に残る風景や遊びにはどんなものがありますか」と尋ね、調査対象者の語りの内容にあわせて質問をした。筆者は「うんー」「そうー」などの相づちを示しながら、できる限り語り手が自由に連想しながら語れるように努めた。調査時間は20分から2時間の間で対象者によって異なった。語り場面を対象者の許可を得てカセットテープに録音した。

2. 済州島の諸特徴の概略⁽¹⁾

済州島は朝鮮半島の西南海上に位置する韓国最大の島であり、行政区域の「道：日本の県に当たる」の中で最も小さい「道」である（図1参照）。総面積は1,826 km²、東西の長さは約73 km、南北の長さは32 kmで、楕円形をなしており、海岸線の長さは253 kmである。済州島は火山活動によって形成された地形が特徴をなしている。島の中央には標高1950 mの漢拏山があり、その周りに広い草原と360あまりの寄生火山が散在している。漢拏山を中心に東西3°-5°の緩慢な傾斜であり、南北斜面は5°くらいで少し急傾斜になっている。気温は暖かく、年平均気温14.6℃、韓国で一番年較差が少ない。済州島には、2万あまりの神々があり、15・6世紀の言葉が現在も使われているなど、独特の民俗文化や美しい自然景観を持っており、1994年から島全域が観光地区に指定された。人口は1970年時点で36万人、1997年現在52万を越えている。

III. 結果

1. 分析方法

カセットテープに録音された会話から、逐語録を作成した。逐語録から物理的環境（空間・場所・景観・風景など）に対する発話を抽出し、KJ法（川喜多，1986）で言葉の文脈を考慮しながら分類作業を行い、原風景の要素をカテゴリー化した。分類しカテゴリー化された各原風景要素について、それぞれの具体的な場所、空間、風景に関する具体化の手続きとして、済

⁽¹⁾ 済州島の概略については、「김항원 (1998) 제주도 주민의 정체성 済州大学出版部」から抜粋した。

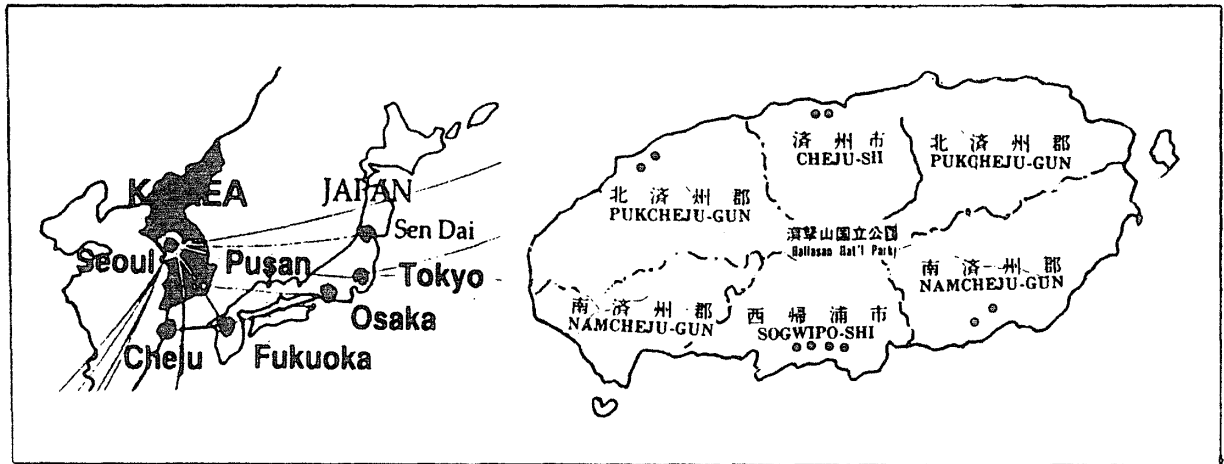


図1 濟州島の位置及び調査対象者の育った地域

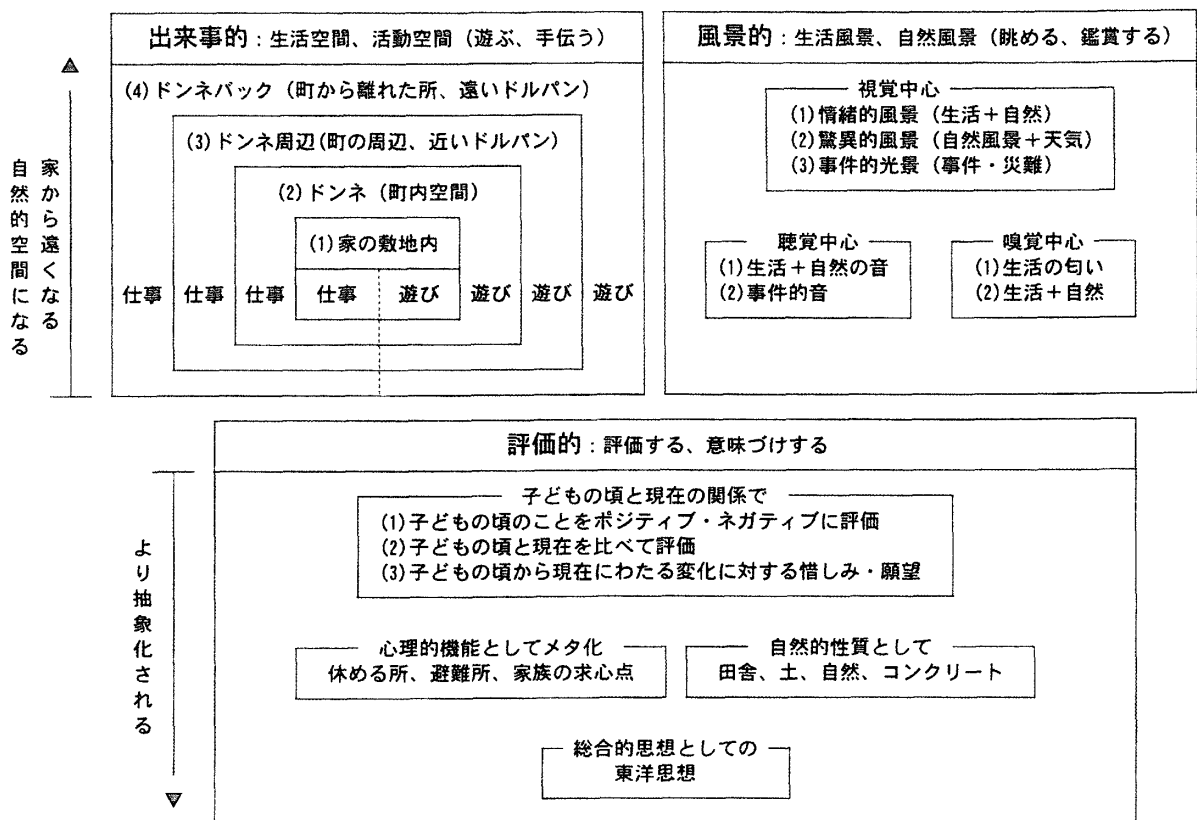


図2 濟州島の原風景における空間・風景の概念のカテゴリー

州島を扱っている写真集からイメージの映像を抽出した。

2. 空間・風景概念のカテゴリー化

語り手の発話文を文脈を考慮しながら分類した結果、大きく3種類のカテゴリーが見出され

表2 出来事的言及における2軸の活動と4つの活動範囲

活動範囲	場所・空間例	活動の例（遊び）	（仕事）
家の敷地内 普通は石垣で囲まれている	・オルレ：家の入り口から庭まで ・ウヨンパツ：家の敷地内の畑 ・ヌル：藪や茅積み ・マダン：家の前の広い空間・庭 ・ウェヤンカン：牛小屋 ・ビョツジャン：押入	・髪留めゲーム、お手玉遊び ・ママごと、土団子づくり ・穴を作って中で遊ぶ、寝る ・ママごと、ミカン箱で家作り ・アジト、お兄ちゃんの中で遊ぶ	日常の家事 除草作業 牛馬に餌
ドンネ（町） 住宅が集まっている主な生活空間	・表門の前、家の周辺 ・ゴルモク（家の周辺の小道） ・大きい木の下、亭子の木の下 ・ボンナン（榎木）の下 ・電柱があるところ ・空き地・広い所 ・ハルマダン（村社） ・池の周辺・共同水道 ・学校：運動場 ：ゴミ焼却場・畑 ：鉄棒、滑り台、登り縄の所 ：畑 ：教室・廊下	・ピンチギ（髪留め取り） ・コンギチギ（小石あそび） ・ザチギ（集団ゲーム） ・サルリンベギ（ダルマさんが） ・マルタギ（馬乗り遊び） ・モクセチギ（壁に石投げ遊び） ・ペンイチギ（コマ回し） ・パンチギ（石切）、木登り ・かくれんぼう ・ゴムひも飛び、石切り、お手玉 ・チャチャリ（小銭ゲーム） ・鉄棒の上を歩く、縄登り ・足ケリ、軍事遊び	水運び 町の清掃 畑の草取り 廊下磨
ドンネ周辺 町の周辺の自然的空間・近いドルバン	・ドルバン（野原） ・サラ峰・洞窟 ・オルム（小山、寄生火山）・洞窟 ・ネチャン（小川） ・貯水池 ・モルゴレ・ダルバンア（牛・馬に引かせて回す穀物をひく臼）	・ボルレ（実を採って食べる） ・ピンイ、チルレ、ツゴノムル ・ゴサリ（旬の葉っぱ、山菜、野野菜、野苺摘みなど） ・ジネ（ムカデ捕り） ・チョンサウム（戦争ごっこ）	薬用草摘み 草刈り 松毛虫殺し
ドンネバック 町の住宅地とかなり離れた遠い所・ドルバン・オルム	・各種のオルム（小山・寄生火山） ・ドルバン（野原） ・オルムとオルムの間の平地 ・洞窟（オルムなどの峰にある） ・バダン（海）ヨンス、アンス、ヨンツア、コムニョ、コンチョンボ、サミャン海水浴場	・サツマイモを焼いて食べる（火事になって消す） ・洞窟探検、コウモリ狩り ・松畑で家作り ・ターザン遊び ・泳ぎながら遊ぶ ・ボマル（貝類）捕り ・魚釣り	焚き物（木集めること） 馬・牛に草を食べさせる

た（図2参照）。まず、空間・風景概念を「出来事的」に用いる場合があげられる（表2参照）。これは、生活・活動の行われる空間を表す場合であり、遊びの場・仕事の手伝いの場・日常の生活の場として記述されている（例えば〇〇山でターザン遊びをした）。2番目に、「風景的」に記述されている場合で（表3参照）、生活の様子や自然環境の変化を、風景として認識し、眺めたり、鑑賞したりする対象として言及されることである（例えば、遠くに見える〇〇山の様子印象深かった）。3番目に、「評価的」に言及される場合で（表4参照）、語り手の自分なりの意味づけや・評価が入って、よりメタ的表現になる（例えば、〇〇山は僕の童心の故郷なの／田舎での生活は自然との呼吸だ）。

（1）出来事として言及される空間概念の分類

図2で示した3つのカテゴリーのなかで特に具体的空間・場所が数多く上げられているのは「出来事的」な部分である。本研究では「出来事的」に言及された空間・風景概念を用いて詳細に記述していく。

出来事として言及された発話文を分析した結果、活動の2軸と、4種類の活動範囲が分類された。2つの軸とは、遊び中心の活動の場になることと仕事中心の活動の場になっていることである。4つの活動範囲とは、家の敷地内（普通は石垣で囲まれている）、ドンネ（町内空間）、ドンネ周辺（町の周辺の自然的空間、近いドルバン）、ドンネバック（町から離れた遠い所の自然的空間、遠いドルバン・オルム）を示す（表

2参照)。

以下にそれぞれの空間・場所に対して、各活動範囲ごとに重要だと思われるいくつかの空間・場所に対する解説と面接で得られたコメント、写真による視覚的イメージを提示する⁽²⁾。

1) 家の敷地内

家の敷地内の空間・場所としては「オルレ：家に入る入り口から庭までの小道」「ウヨンパッ：家の敷地内の畑」「ヌル：藁・茅を積んでいるもの」「マダン：家の前の広い空き地、庭」「ウエヤンカン：牛小屋」「ビョッチャン：押入」があげられた。以下に「オルレ」「ヌル」「マダン」について紹介する(図3参照)。

①オルレ(濟州島語)

濟州島の伝統的な家に多く見られる空間である。家の入り口から細い小道を通して、家が望めるようになる空間であり、共同の道ではなく各家の所有地である。この空間が子どもたちの遊び場になっている。共同の道に近い入り口の所は子どもたちがたむろする所である。

②ヌル(濟州島語)

家の敷地内の畑の隅っこや家の前の空き地の隅っこにあった藁や茅の積み山である。この藁や茅は生活のための燃料として、茅葺き屋根の屋根替え、また冬の畑の保温のため、農作物の保管のため使われるなど生活上重要なものである。毎年各家ではヌルを積んで置いていた。こ

こで子どもたちは下の藁の束を取り出し、穴を作って中に入って寝たり、ママごとをしたりする居心地よい空間であった。

③マダン(韓国語一般)

家の前の広い空き地で、農産物の整理の場、洗濯干しの場、農器具の整理の場、家族団らんの休みの場になったりする。大きい行事があるときは行事の場(イベントの場)、交流の場にもなる。子どもにとっては安心して遊べる外遊びの場所になっている。マダンの隅っこに花壇があったり、水道があったり、犬小屋があったり、牛小屋があったりするが、全体が花壇の庭ではない。

2) ドンネ⁽³⁾(町)

ドンネは一般の韓国語の空間概念である。日本語にすれば隣近所・町内・横町・集落などが一番近い。濟州島の農家は集村形態になっていて、ある程度まとまった住居空間があり、また離れた所に畑があるという空間構造になっている。行政区域としては畑などがある所も同じ町の住所になっているが、生活の感覚の「ドンネ」は、集まっている住宅空間でお店や学校などがある空間を指す。また同じ住所を持つ町の中で「アルドンネ：下の町」「ウットンネ：上の町」「ソットンネ：西の町」「ドントンネ：東の町」という地理的表現や「ウリドンネ：我が町」「ノネドンネ：あなた達の町」という住宅の集まりか

⁽²⁾視覚的提示

視覚的提示に関しては、濟州島を取り上げた6冊の写真集・本から取り出し、使用した。本来の写真作者が伝えようとした意図通りではなく、原風景に関連する濟州島の空間構造の理解のために筆者が解釈をしながら説明を加えた。写真の出典は次の通りである。

- ① 현을생 (1998) 제주의 여인들 木石園(写真1)
- ② 濟州道 (1997) 濟州道民俗遺跡(写真8)
- ③ 濟州教育博物館 (1995) 만농 홍정표 先生写真遺品集- 제주의 아이들(写真2, 6, 9, 10, 14)
- ④ 濟州道・濟州芸総 (1995) 光復50年, 오늘에 남아있는 日帝의 흔적들(写真12, 13)
- ⑤ 濟州道 (1996) 道昇格50年記念写真集濟州100年(写真7)
- ⑥ 韓国移動通信濟州支社 (1995) 濟州觀光ガイド(写真3, 4, 5, 11)

⁽³⁾ドンネは行政区域上で使われる用語ではない。日本で行政区域上の用語として使われる「町」に近い韓国の用語としては「里」「洞」などがある。この「里」「洞」全体をドンネと呼ぶ場合と、「里」「洞」の中でもいくつかのまとまりの居住空間があり、それぞれの居住空間としてのより狭い範囲をドンネと呼ぶ場合(隣近所に近い)がある。濟州島において「里」「洞」など大きい意味のドンネの面積は平均8km²(田畑、林野なども含めて)、人口1,000人~3,000人くらいの規模である(面積と人口に関しては濟州道1998年度統計年報による)。

〈1〉



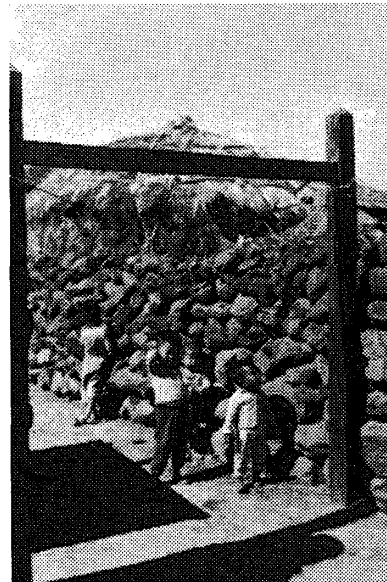
[オルレ：写真1. 2]

お婆さんと子どもたちがいる所は共有地の道ではなく私有地の進入路である。

コメント

- ・私の家のオルレでよく遊んだの。髪留め取りとかお手玉をしながら…
- ・大門のあるオルレでままごと、コム飛びなどをした。

〈2〉



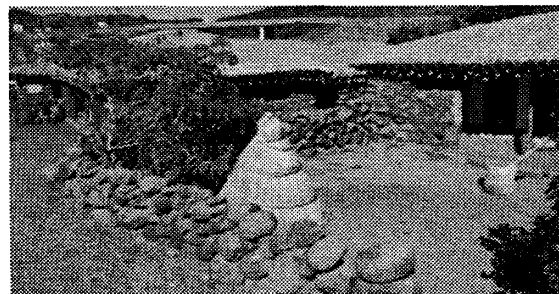
〈3〉

[ヌル：写真2. 3]

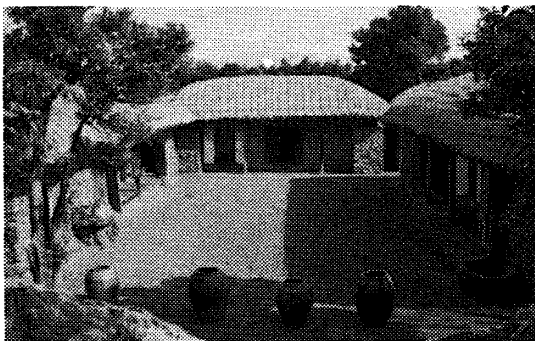
石垣の中のマダンの隅っこに茅の積みがある。

コメント

- ・麦の藁を積んでいるヌルに穴を作って…
- ・下の茅束を取り出してその中で寝たり…
- ・田舎の池のそばにヌルが2つあって、そこは居心地よい私の丘なの。
- ・ウヨンパッでヌルの所に座って土と草で団子作りをした。



〈4〉



[マダン：写真3. 4]

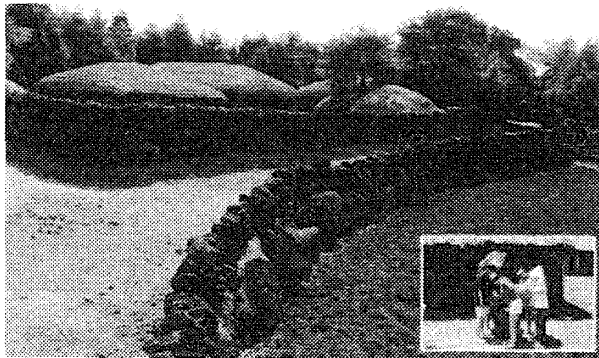
家の前の広い所、作業の場、家族団らんの交流の場、行事の場になる。

コメント

- ・ミカン箱で家作りをしたり、ゴム飛び、ままごと、小ボールたたきなどをした。

図3 家の敷地内

〈5〉



[コルモク：写真5. 6]

中間の道から家々につながるコルモクで遊んでいる子どもたち。

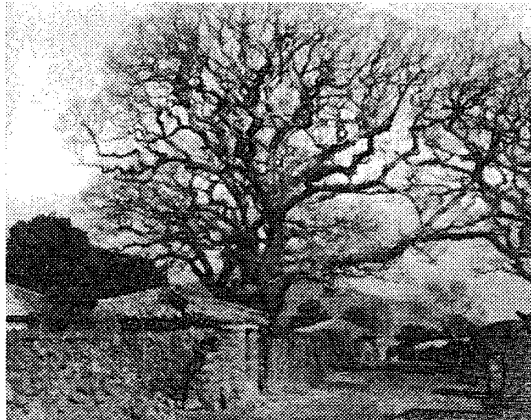
コメント

- ・家の前とかコルモクでよく遊んだ。石切、お手玉、ゴム飛び…
- ・コルモクはとても重要な場所なの。その当時の友達って、コルモクの友達から始まるね。その後学校の友達とかになるね。
- ・木の下で馬乗りとか、サルリンベギ（ダルマさんがごろんだ）とか広い所でカルサウム（木で作った刀の遊び）。

〈6〉



〈7〉



[ボンナンアレ：写真7]

ドンネの交差点などにある大きい榎が人々に休める所、遊ぶ所を与えている。

コメント

- ・電柱とか大きいボンナンがあるところ、大きい木があるところであそんだ。ボンナンの黄色い実を取って食べたり、木に登る途中落ちたり、登って行って上であそんだり…

〈8〉



[ハルマングン：写真8]

ドンネを守ってくれる霊がある所。昼間は遊びの交流場だが夜は怖い。

コメント

- ・廉探しに行ってお金を見つけたりそこには必ず木があるから木に登って実を取って実を食べたりした。岩、木、古木などが必ずあった。夜は怖いから行かないの。

図4 ドンネ（町内の住居空間）

らくる所有概念も使われる。原風景の語りであげられるドンネは、人々の集まって住む住宅空間・生活空間を指す。ドンネの中の空間・場所として「ゴルモク：小道」「ポンナンアレ：木の下」「ジョンボッテ：電柱の下」「コント：空き地」「ハルマンダン：村社」「モッカ：池の周辺」「コンドンスド：共同水道」「学校」があげられている。ドンネの範囲のいろいろな場所・空間では子どもたちの多様な形の遊びがある。特に集団であるゲームの遊びや2～3人で道具を用いる遊びなどが多い。ここでは、「ゴルモク」「木の下」「ハルマンダン」について記述する（図4参照）。

①ゴルモク（一般の韓国語）

ゴルモクは道に関する空間概念である。車が通る大通りではなく、大通りの裏等に繋がっている小道である。通常バスなどが通る大通り、ゴルモクに至る前の一般的道として中間通り（実際には名前が付いてない）があるが、数個の住宅の集まりをつないでいるのがゴルモクである。ゴルモクは、子供たちの遊び場になるのはもちろん、大人、老人たちも集まって話したり、作業場の延長になったりする、隣り近所の日常的な交流空間^④である。日本の路地のイメージに近い。大通りと中間道は閉ざされることなく、通れるようになっているが、ゴルモクは最後は閉ざされて誰かの家や畑の入り口で終わる。

②大きな木、ポンナンアレ（大きな木・榎の下）

濟州島の各町の交差点、あるいは道の少し広い所に大きい木が植えられている。木の下には人が座れるように周りに石やセメントなどで段（濟州島語でパン）が作られている所も多い。これらの木は大通りにも中間通りにもある。また、畑や果樹園をする農家には石垣の周りに防風のために大きい木があるところも多い。特にゴルモクにその大きな木が配置されると陰をつくるので、そこが遊び場所など交流空間になる。子どもだけではなく大人達も道を通りなが

ら一休みしたり、雨の日は傘を持ってきて、バスから降りてくる子どもを待ったりする所である。子供たちは木に登り実を取って食べたり、木の下で多様な遊びをしたりする。

③ハルマンダン（濟州島語）

町の人々の全てを守ってくれる神が居ると同時にその神のための祭祀を行う所である。この祭所を「ダン」という。濟州島各地に多様な種類の「ダン」がある。町の周辺の大きい木があるところ、海の近く、山の近くなど多様な所にあり、多様な形態をしている。ここは、祭祀の所なので大人達が使う所であるが、昼間は子供たちの遊び場である。また夜は怖いと感じる所でもあって、交流空間と恐怖空間として存在する。日本のイメージでは神社があるが、神社のように制度化されてはならず、より原始的、シャーマニズム的である。

3) ドンネ周辺（町の周辺、近いドルパン）

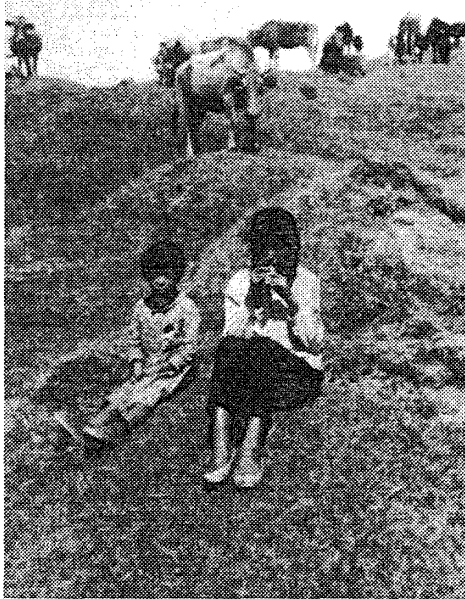
濟州島の地形は火山によって形成されているので、寄生火山とその周辺に草原地帯が多い。住宅空間の周辺には畑や果樹園などがあり、その回りには草原やオルムという寄生火山である丘・峰がある。この草原・丘の地帯は昔は茅葺き屋根や馬・牛の飼育に必要な茅の収穫地帯であった。本格的に茅を収穫するまではない所でも、畑以外の土地で草や野原の実などがある草原もこの範囲に含まれる。畑とまだ開拓されていない草原が交じっている場所である。この範囲は畑と近いので、大人が通っていたり、生活空間の町からは離れているが遠くに住宅たちが見えたりする。子どもたちは集団でこのような少し荒っぽい草原、まだ畑として開拓されていない草原で遊んでいた。このようなところでよく遊んだと挙げられたのは「ドルパン：野原、原野」「ネチャン」「貯水池」「モルゴレ」等である。ここでは「ドルパン」「ネチャン」を紹介する（図5参照）。

①ドルパン（一般の韓国語）

日本語にすれば「野原」「原野」である。上で

^④本研究で用いた交流空間・探検空間・危険空間・禁止空間の用語は、南（1994）より、狩猟・採集空間は、奥野（1972）の使い方による。

〈9〉



[ドルパン：写真9.10]

畑の地帯の中でまだ開拓されてない狭い草畑や空き地、もう少し遠い所に草原がある。これらが子どもたちの遊び場ドルパン牛の世話をしている子どもと、子どもたちがよく遊んでいたドルパンの典型。

コメント

- ・ドルパンに行って、ピンイを取ったり、タマネギの茎で笛を吹いたり、花を摘んだりしてドルパンとか山にうろつき回ったの。ゼンマイ採り、ボルレ（木の実）、野莓摘んだり、山菜を摘んだり、ムカデを捕まえた。
- ・木を刻んで銃を作ってチョンサム（銃のごっこ）をしたり。

〈10〉



〈11〉



[ネチャン：写真11]

畑やドルパンに行く途中或いはドルパンの一部にネチャンがある。夏は子ども達の水遊び場だけど危険なときもある。写真のネチャンは溪谷にあるものなので普通のネチャンより広い。

コメント

- ・夏はネチャン。危ないから行くなと言われるけど、よく行った。
- ・ネチャンは町の周辺に多いからそんなに遠くはない。面白い名前のネチャンが多かった。ジュジェンギ、ボミス、ソエ、ジャンティムルなどの名前ね。
- ・カエルを捕まえて焼いて食べたり、水遊びをしたりした。

図5 ドンネ周辺（町の周辺，近いドルパン）

〈12〉



[オルム：写真12.13]

遠くに見える3つの峰、寄生火山のオルムが見える。子ども達の探検遊びの場になっていた。

コメント

- ・私の町はオルムがとても多いからよくあそんでいた。
- ・松林で家を作って遊んだり、オルムでサツマイモを焼いて食べたりして、火事になっちゃって急いで火を消したり。
- ・カッスニオルム、スルオルム、ソルオルム、タレギ、バンガッオルム、コガオルムなどがあつた。

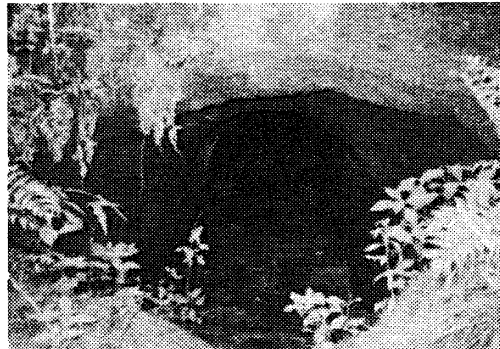
〈13〉

[洞窟：写真13]

写真12のようなオルムに多様な洞窟がある。人工物であるが子どもにはわくわくする所である。

コメント

- ・オルムにある洞窟探査、なかにあるコウモリを捕まえたりした。
- ・洞窟は探検と未知の世界なの。真っ暗でどろぼとか海敵などを思い出す。
- ・怖さ、恐怖、驚異さ…
- ・ㄱ模様の窟、ㄴ模様の窟、ㄷ模様の窟等多様な形態なの。



〈14〉



[バダン：写真14]

濟州島の海岸は石が多い。平らな海水浴場ではない石の海で子どもは楽しく遊んだ。

コメント

- ・バダンで泳ぎながら遊んだりボマル（貝類）を取ったり…
- ・ヨンスは毎日の水遊び場、ほぼ毎日行ったの。ヨンス、アンスヨンツァンなどにね。
- ・1・2時間歩いてバダンに行ったボマルを取ったり、泳いだり。
- ・コンムニョ、コンチョンポは遠いから、お父さん達と一緒にいった。

図6 ドンネバック（町から離れたところ、遠いドルパン）

示したように、畑周辺にある、まだ畑になっていない草原地帯で、畑でとぎれたりもし、畑と草原が混じっている地帯に近い。町の住宅街から離れたより自然的空間である。そこでやわらかい草の葉っぱを採ったり、実を取って食べたり、ムカデを捕ったりする採集・狩猟の活動と、集団で戦争遊びをしたり、隠れん坊やサッカーをしたりする。1人でドルパンに行くことはあまりなく集団で集まって行く所である。狩猟・採集・交流の空間である。

②ネチャン（濟州島語）

ネチャンはドルパンにある小川のことである。濟州島の小川は水が流れていない時期が多い。玄武岩の地層になっているので普通は水が地層に吸い込まれ水のない乾いた川である。ネチャンの意味は、水が乾いてチャン（地面の濟州島語）が見えているという意味である。夏は降水量が多いのでネチャンに水が溜まっている。大雨の時は水が橋の上まで氾濫して急速に流れるので、毎年事故が起こるなど、とても危険な場所でもある。雨が上がった後は子供たちの水遊び場になる。ドルパンの一部にあるので多様な植物や昆虫が存在している。交流・探検・狩猟・採集の空間である。

4) ドンネバック（町から離れた所、遠いドルパン）

この領域は2つの方向の領域が考えられる。1つは山の方向であり、上に示したドルパンの延長の地帯で、より広い草原やオルムという寄生火山の峰・丘の所である。オルムという小山は造成林が植えられてない草だけの所が多かった。オルムとその周辺は牧場畑という茅の収穫が中心になっているところも多い。また自然にできた松林と草原の混じった形態の所もある。濟州道全域にこのようなオルムや草原があり、またそこには洞窟があるところが多い。日本に占領された時代に戦争準備のために人工で作られた洞窟だが、その一部は子どもの遊び場になっていた。また遠い範囲という意味では、山の反対方向のバダン（海）の方向である。この範囲で遊び場としてよく挙げられた言葉は「オルム」「洞窟」「ドルパン」などがあり、違う方

向として「バダン：海」が挙げられた。

ここでは「オルム」「洞窟」「バダン」について詳しく紹介する（図6参照）。

①オルム（濟州島語）

火山活動によって形成された寄生火山で濟州島全域に360あまりのオルムがある。子どもにとっては家から近いオルム、遠いオルムなど多様なオルムでの体験がある。この領域は町からもかなり離れているので、日常的ではなく一定の時期に集中して集団でいく所である。遊び・活動自体は町の周辺のドルパンでのそれと似ているが、オルムはかなり遠い所という印象があり、男の子中心の場合が多い。探検・交流・狩猟・採集の空間である。

②洞窟

オルムに多くの洞窟がある。一つのオルムにも数個の洞窟がある。その洞窟の一部が子どもたちの探検の空間になっている。現在は虞犯地域としてとらえられ立ち入り禁止になっている所もある。探検・狩猟・交流の空間である。

③バダン（海の濟州島語）

山の方向と反対に海が遊び場になっている。海辺に住んでいる子供たちには近い所であるが、中山間地域（山のほうにある町を示す）に住んでいる子供たちには遠い所になる。子どもの遊び場になっているバダンは一般的な海水浴場ではない。家から一番近い町に所属している海で遊ぶ。濟州島は山も海も石が多い。海岸のほとんどは黒い石や岩が多い。石だらけの海で泳いだり、魚を捕ったり、サザエやポマル（貝類）を取って食べたりする。また、海岸のところで冷たい水が出る泉が多いのでそこで体を洗う沐浴の場にもなっている。交流・探検・採集の空間である。

(2) 風景として言及される空間概念の分類（表3参照）

風景的言及とは、出来事的言及と同じ空間・場所に対して語られても、そこでの遊びや仕事などの活動の場としてよりは、ある種の景観的性質が言及される場合である。風景的言及の中でもっとも多かったのが視覚中心の言及であり、天然の自然景観と生活的感覚が含まれて全

表3 風景的言及における言葉の分類

感覚モード/ 風景の性質		言及された風景の具体例
視覚中心	情緒的風景 (生活+自然) ・のどかな雰囲気を感じさせる ・強烈な印象 ・故郷を感じさせる	・秋のサツマイモの畑の風景、サツマイモの切り干しの風景 ・キジの卵のある光景、麦畑の風景大根切り干しの風景 ・石垣の上に咲いている野花の風景、バスに乗って見られる海の風景 ・山の風景、石畑の風景 海岸の風景、穏やかな海 ・野原に大きく立っている木、海、石、山 ・夕日の風景（強烈な色）、夕飯の準備と子ども達の様子 ・オルム（小山）が並んでいる風景 ・鬱蒼な松林の風景
	驚異的風景 (自然+天気)	・嵐の時の海の波、夏の雨で小川（ネチャン）が氾濫する時 ・野原の嵐、台風
	事件的風景 (政治・災害的)	・4・3事件（政治的要因による集団虐殺）の時の火事 ・軍隊の行進の風景
聴覚中心	生活+自然の音	・ザランザラン（子守歌） ・メルダ！（イワシの群が近く of 海に来ていることを知らせる音（メルダ！と叫びながら金属の器をたたく音）
	自然の音	・犬の唱える音 ・セミ、カエル、コオロギの鳴き声
	事件の音	・4・3事件の銃の音、6・25（朝鮮戦争）の時の射撃場の銃の音
嗅覚中心	生活の匂い	・お母さんの乳の匂い、麦の種まきの時コルム（肥やし）の匂い ・祭祀の時の食べ物の匂い、肉の串焼きの匂い
	生活+自然の匂い	・海の匂い、草の匂い、麦畑の匂い、クサン木の匂い、ススキの匂い ・ポリチップ（麦藁）の匂い

体的に風景として言及される場合が多かった。聴覚や嗅覚に関連する言及も自然物だけの物よりは生活の営みから生じることが多い。風景が中心に示される風景的言及においても、必ずと言っていいほど生活の感覚や生活から生じてくる視覚的、聴覚的、嗅覚的現象を含む風景として記憶され、想起される傾向があることが示された。

(3) 評価として言及される言葉の分類（表4参照）

評価的言及は、出来事的言及や風景的言及に基づき、自分なりの意味付けや評価をしながら言及される場合であり、活動そのものや、風景そのものについてではなく、多様な活動を行ったり、風景を見てきた事に対する評価として示された。評価的言及は大きく3つの次元に分類された。まず、過去の活動や風景それ自体を良

かった・悪かったなど、「直接評価」をする場合、2つ目に、より「メタ的に意味付け」をして休める処、避難所、童心の心など心理的機能として言及される場合と土・コンクリートなど自然性として言及される場合があった。また3つ目に、子供時代を過ごした環境と活動などの全部を含みながら東洋思想など「総合的思想」として言及される場合が示された。

IV. 考察

以上、対象者との個別的な語り合いから見えてきた、濟州島の空間特性と原風景の関連について述べてきた。原風景を語る時、空間・風景に関する言葉がどんな風に用いられているのかを検討した結果、①遊びや仕事など生活空間として語られる場合、②眺めたり、鑑賞するような風景として語られる場合、③童心の故郷、

表 4 評価的言及における言葉の分類

意味付けの次元		具体的例
直接的評価	子どもの頃を ポジ/ネガ に評価	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返される軍事遊びは否定的だ ・遊びという文化はなかった ・その当時は学校での仕事だった
	その当時と 現在を 比べて評価	<ul style="list-style-type: none"> ・貧乏だったのに悪い記憶ではなく良かった ・懐かしい ・今の方が遠くにいけない、車も多い ・その当時はいちいち干渉しなかったけど危険でもなかった ・今はわざわざ子どもを畑に連れていっている ・ここはいつも見ているところ、いつもいい感じ
	現在の変化 関する 願望・惜しみ	<ul style="list-style-type: none"> ・童心の故郷なのに壊されることは寂しい ・残してほしい、童心を分け合うために、濟州島のシンボル ・変身ぶりが過激すぎる、自然な流れではない ・食べ物の味も全部科学的に分析されてしまう ・誰かによって操縦される変化はイヤだ ・濟州島のナマリは保存してほしい
よりメタ的意味づけ	原風景・田舎 を心理機能と して意味づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・休める所（鳥の音、海の音、綿雲、花、子どもの頃自体が休める所 ・避難所（逃避にもなり、平和にもなる） ・家族の救心点
	原風景・田舎 を自然性とし て意味づけ	<ul style="list-style-type: none"> ・田舎（幸い私たちは田舎にいるから） ・土（土と一緒に呼吸する） ・自然（自然と共にする機会）（生きている自然と友にしながら） ・コンクリートの壁と一緒に住む人達とは違う ・自然と生活することがとても好きだった
総合的	思想・哲学 として表現	<ul style="list-style-type: none"> ・東洋思想 ・人類の指向点

避難処、自然との生活など何らかの意味づけや評価として語られる場合があることが明らかになった。この中でも特に実際の物理的な空間特性がよく見られる出来事として語られる事例の発話文を用いて、空間特性と関連する2つの軸と4つの範囲に分類し、写真を提示して記述した。

原風景のボキャブラリーには、一般の韓国語で名付けられている空間(マダン, ゴルモク, ドルパン, 洞窟)や、濟州島の言葉で名付けられている空間(オルレ, ウヨンパツ, ポンナンアレ, ハルマダン, ヌル, バダン)がある。一般韓国語で名付けられている空間でもそれらは濟州島の地形の特性と関連している空間であることを示した。表2であげられた内容からもわ

かるように、現代の子どもの遊び状況から連想されるゲームセンター、団地、公園、テレビ、市街地などはいずれの面接からもでなかった。これらは1960年代から1970年代ころの濟州島の物理的環境の特徴・状況と関連があると考えられる。まだ都市化が進んでない状況の中で、ちょっと行けば狩猟・採集の遊び場となるドルパンを全員が一番多く挙げている空間である。近くにあるドルパンと遠くにあるドルパンでの遊びを語る時の語り手達の表情はとてもワクワクした雰囲気であった。原風景として挙げられ検討してきた多様な空間・場所全体をより抽象化したメタ概念としてまとめたのがドルパン、田舎、土などのボキャブラリーであった。これらの表現は奥野(1972)が言う「原っぱ」の意

味とも相通じる点があると考えられる。奥野（1972）は「文学における原風景」で作家の文学作品や本人の体験を例にして、都市における原っぱは子どもたちの自己形成空間としてとても重要であることを指摘し、ある空間の隅っことしての広義の原っぱ的性質を強調した。また田舎においても単純に自然環境ではなく自然・野原の隅っこの原っぱが重要な空間であると指摘しながら、原っぱでの「狩猟・採集遊び」の起源は縄文文化にあると示した。

ドルパンは日韓辞典（安田・孫，1983）によれば「野原・原野・原っぱ」が一番近い。奥野（1972）の「広義の原っぱ」の指摘と本調査においてドルパンが最もよく挙げられたことから日本においても韓国においても原風景形成において「ドルパン・野原・原っぱ」がとても重要な共通の空間として考えられることがうかがえる。それぞれの地域が持つ地理的・空間的特徴は違うかもしれないが、その地域にある「ドルパン・野原・原っぱ」が持つ性質に共通性があるのではないと思われる。調査対象者であった現在の大人達の原風景から、意味深い重要な空間・場所として「ドルパン」が挙げられたが、現在の子ども達はどのような空間・場所を原風景として思い浮かべるだろうか。地域・世代によって地理的特徴が違うとしても、その背後にある原風景になり得る空間や場所に共通する性質特徴を探る事が今の時代に重要な課題ではないだろうか。

文 献

- 川喜多二郎（1986）KJ法 — 渾沌をして語たらしめる 中央公論社
- 高橋義孝（1978）原光景と原風景 思想 653 27-35
- 南 博文（1995）子供たちの生活世界の変容 — 生活と学校のあいだ 南 博文・やまだようこ（編）子ども時代を生きる 金子書房 1-26
- 南 博文 他6名（1994）地域における子どもの遊び環境アセスメントと親子の環境体験プログラムの開発 マツダ財団青少年健全育成研究助成報告書
- 日本造園学会（1985）造園用語辞典 彰国社（原風景項目を進士吾十八が書いている）
- 呉宣児・南博文（1998）語りから見る原風景（1） — 個人内の原風景：語りの種類と語りタイプ — 九州大学教育学部紀要教育心理部門 第42巻 第2号, 93-104
- 奥野健男（1972）文学における原風景 集英社
- 安田吉実・孫 洛範（編）（1983）韓日辞典 民衆書林 1983
- 安田吉実・孫 洛範（編）（1973）日韓辞典 民衆書林 1973
- 星野 命・長谷川浩一（1985）青年の心の風土としての原風景 九学会連合日本の風土編集委員会編 日本の風土 119-136 弘文堂
- 井上桂朗（1995）原風景の心理学的研究 鹿児島大学法文学部紀要：人文科学論集 第41号 26-68
- 勝原文雄（1986）村の美学 — 原風景と修景の座標 創論社